

# 令和4年度実施教員採用試験結果

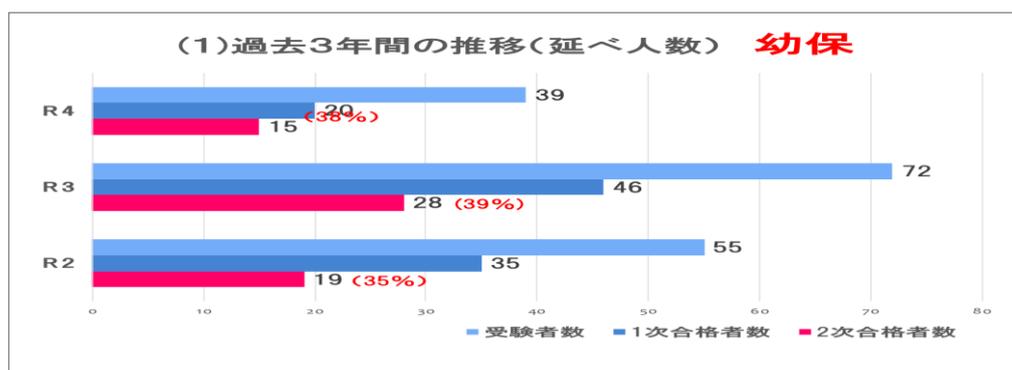
教職支援センター副センター長  
特任教授 榎元 十三男

## 1. 全体の概要（昨年度との比較）

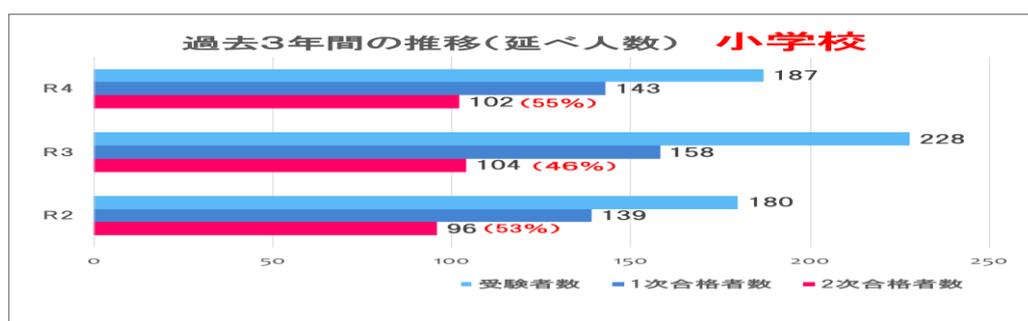
令和4年度実施 公立学校園教員採用試験結果(延べ人数)				令和3年度実施 公立学校園教員採用試験結果(延べ人数)			
幼・保・・・受験者	39名	1次 20名	2次 15名	幼・保・・・受験者	72名	1次 46名	2次 28名
小学校・・・受験者	187名	1次 143名	2次 102名	小学校・・・受験者	228名	1次 158名	2次 104名
中学校・・・受験者	59名	1次 31名	2次 24名	中学校・・・受験者	40名	1次 20名	2次 10名
高等学校・受験者	0名	1次 0名	2次 0名	高等学校・受験者	0名	1次 0名	2次 0名
栄養教諭・受験者	0名	1次 0名	2次 0名	栄養教諭・受験者	3名	1次 1名	2次 1名
養護教諭・受験者	0名	1次 0名	2次 0名	養護教諭・受験者	1名	1次 0名	2次 0名
<b>計</b>	<b>246名</b>	<b>194名</b>	<b>141名</b>	<b>計</b>	<b>344名</b>	<b>225名</b>	<b>143名</b>
		<b>最終合格率:57%</b>				<b>最終合格率:41%</b>	

◆総受験者数は約100名減ったものの、1次試験の合格率、2次試験の合格率はともに昨年度を大幅に上回った。とりわけ中学校の合格率は優位に上回った。

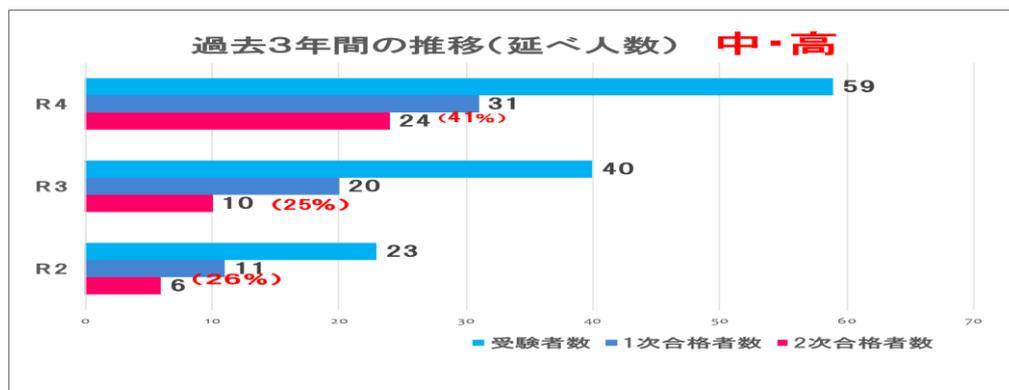
## 2. 公立学校園種別過去3年間の延べ人数の推移



◆受験者数が大幅減 公立幼稚園・保育所が認定こども園化 公立採用数減



◆受験者数減 合格率過去最高水準・・・55%



◆受験者・合格者数大幅増 近年では大躍進・・・41%

### 3. 今年度の主な取り組みから

#### (1) 学生の主体性を重視した教員採用試験対策

「自立心」「対話力」「創造性」は、本学の建学の精神に基づいた教育目標である。とりわけ「自立心」については、教員採用試験の取り組みの過程においても数年前から自己実現に向けた教育の一環と捉え、自己選択、自己判断、自己決定を常に促してきた。その結果、自主練習や情報交換等を通して自分のことだけに留まらず、学生同士が互いの良さや改善点にまで言及し合いながら切磋琢磨する姿が見られるようになった。目標達成に向かう仲間の中に自分自身の姿を重ね合わせ、くじけそうな自分を常に鼓舞しながらやる気に繋げていると話す学生も多い。意欲やモチベーションは、刺激し影響し合う中でこそ高まっていくものであることを学生の言動の中に感じ取ることができる。

これらの主体性の芽生えの前提として、教員採用試験についての最新情報の提供や相談活動の実施、筆記試験対策や模擬授業・場面指導・面接練習等を教職支援センターの職員が総力を挙げて下支えしていることは言うまでもない。また、教職課程を担当している学科の教員が学生のやる気を引き出し、後押ししてくださっているお陰でもある。

本学の学生は、少しの支援で自らの持てる能力以上の力を発揮することができる。4年間の教職課程の基礎基本を学び抜いてきた成果である。一方で、学生の置かれた背景は一様ではなく、きめ細かな個別の対応が必要になってくる場合もある。今後も決して見逃すことなく、すべての学生が自分に自信と誇りを持って考え、判断し、主体的に取り組むことができるように支援体制を整えていきたい。

#### (2) 学校現場等での多様な体験活動の実施

インターンシップ、スクールサポーター制度等を活用し、2回生から日常的に子ども達と関わる体験ができることは本学の強みの一つである。日常の授業支援や特別支援学級のサポート等が主な活動内容であり、子どもとのやり取りや授業の進め方等教師の基礎基本を間近で学べることは、大学だけでは成しえない学びのチャンスと言える。

近年では将来を見据えた上で、野外活動ボランティアや子ども食堂、児童養護施設等での体験を自ら求めて参加している学生も増えてきた。これらの活動は、教職に就き児童生徒の真の姿を理解していく上で重要な意味を持つ。子ども達の置かれた現状や学校現場の実情に直に触れることで、教職の意義とともに魅力ややりがい等を肌で感じ取るきっかけとなっている。「チーム学校」の本当の必要性が分かってきたと話す学生もいる。

また、教育実習に先立って体験することで、教育実習事前学習の内容に厚みと深みを増す結果ともなっている。学校現場に足を踏み入れることの不安感を払拭し、自己実現を身近に引き寄せ、見通しを持って取り組めることも利点の一つである。

何よりも、受け入れていただいた学校現場からは、それぞれが目的意識を持って学び取ろうとする学生達への感謝の言葉とともに常に高い評価をいただいていることが大きな励みになっている。教員採用試験の真ただ中にある4回生であっても、学校現場に敢えて足を運び、子ども達や先生方から新たな刺激をいただきながら、模擬授業や面接の練習に繋げている学生も多い。面接等においては、実体験に裏打ちされ実感を伴った受け答えは信頼性、妥当性の面で説得力を増す。今後も、自分ならではの感性を磨き、体験活動を通してこそ身に付く思考力や判断力等を養ってもらいたい。

### (3) 現職既卒生との豊かな関わり

教採対策ワークショップや模擬授業・面接練習等様々な場面に既卒生が入り交じっていることが近年目立つようになった。これも他大学にない本学の特徴の一つである。ワークショップでは毎年既卒の先輩を招いて教採対策のポイントや留意点等を話してもらうこととしている。自分に取り組んできた経験に基づいた的確なアドバイスは、我々以上の厳しさも感じられる時がある。また、直近の実際の体験者の声は何にも増して現実味があり、これから教採に取り組む後輩学生にとって確かな支援となるので好評である。

近年、夏休みや代休等を利用して自主的に教職支援センターを訪れる既卒教員も増えてきた。自分自身の日常の授業や学級経営についての悩みの相談のみならず、後輩達の模擬授業や場面指導、面接練習等においても何か力になりたいと思つての来学であり、我々職員にとっても大きな戦力となっている。学級経営や保護者対応、教員間の人間関係等については様々なケースがあり、解決に向けての特効薬はないので、とにかく聴くことに徹している。自分の悩みを外に発することで自力解決への第一歩になることを願っている。また、自ら実践したICTを活用した授業を学生たちに披露したり、研究授業で作成した資料を持ち込んで授業の足跡をたどりながら説明したりする既卒教員もいる。これは、現役学生にとってはまたとない学修の場であり、模擬授業等に生かすことができる。

中には、教員採用試験に再チャレンジのために訪れる既卒教員もいる。現役学生に交じって模擬授業や面接練習に取り組むこととなるが、現場体験に裏打ちされた受け答えは具体例や発する言葉に納得させられるものが多く、これもお互いの刺激になっている。

卒業してからも気軽に戻ることができる環境作りとともに、現役生との豊かな関りが自然にできるようなネットワークの構築にも工夫していきたい。

#### (4) 教育委員会との連携強化

本学では、これまでも様々な形で各自治体の教育委員会と連携を図りながら教員採用試験対策に取り組んできた。その先駆けとなったのが、教職支援センターの多畑部長による教育委員会訪問である。委員会からの来学を待つのではなく、こちらから積極的に訪問して送り出した既卒生の様子を尋ねたり、双方が抱える教員採用と養成についての共通課題等についての意見交換をしたりするなど、互いの関りを深めてきた。

その取り組みの一つとして、今年度は個別の教育委員会による説明会だけではなく、「神女教職フェア」と称して多くの教育委員会が一堂に集まり、合同説明会を開催する運びとなった。これは、訪問を重ねる中で、教育委員会側からの提案を受けての開催である。

開催に向けて、各委員会との連絡調整や準備には時間がかかったが、教職支援センター職員のチームワークと教育学科の教員の支援のお陰で、14自治体の教育委員会の参加を得て実現することができた。それぞれの委員会の趣向を凝らした説明には、学生の満足度も高く一人ですべての自治体を回った学生もいた。

「他の自治体と比較しながら説明を聞くことができた」「選択肢の幅が広がり、複数受験をしようと思う」「自治体の特色だけでなく教職の魅力ややりがいについての話もたくさん聞けたので、さらに教職への思いが高まり、教職一本で頑張りたい」など、学生からは多くの肯定的な声を聞くことができた。教育委員会からは、「学生からも多くの質問があり意識の高さを感じることができた」「他の自治体の説明の様子も拝見でき、取り入れたいこともたくさんあった」などの意見が聞かれた。その点では、「神女教職フェア」が教育委員会同士の情報交換の架け橋の場になったことも成果の一つに挙げられる。

「神女教職フェア」は一例に過ぎないが、今後も時代の変化に伴った各自治体が求める教師像も変わってくるものと思われる。したがって、これからこそ送り出す側と受け入れ側が一体となり連携強化を図りながら、現場で通用する教員を育てていく必要性を強く感じている。

#### (5) 受験報告書の作成

本学の教採対策は「受験報告書」の作成をもって終了となる。1次の筆記試験の内容、2次の面接試験や模擬授業・場面指導・実技等についての詳細な報告を求めている。その理由は、歴代受け継いできた先輩の報告書が何物にも代えがたい後輩への贈り物となっているからである。これらは自治体ごとにまとめて保管し、誰でも自由に閲覧することができるようになっている。我々職員にとっても重要な資料である。参考資料は新しく、詳しく、豊富なほど役に立つ。複数受験を推奨している理由もここにある。

本学では、教員採用試験を個人戦ではなく団体戦としてみんなで共に取り組んできた。助け

合い支え合うことが、最終的には自分に返ってくるからである。また、教員になったとき、チームの一員として役に立つことを喜びとすることが求められるからである。そして、そのことを将来を生きる子ども達にも気付かせていかなければならない立場となるからである。

近年では、受験内容の詳細な報告に限らず、受験の心構えや後輩へのエール等も付記されるようになった。有難い心遣いである。もっと嬉しいのは、残念な結果となった学生の丹念な報告書も散見されるようになった。その報告書をどんな思いで書いてくれたのか、我々はもっと心を寄せ決して無駄にしてはならないと感じている。

#### 4. 今後の展望

今年度も予想以上の好結果が得られた。高い目的意識をもって努力する学生とそれをサポートする教職員、教職支援センター事務部門が一体となって取り組んできた成果である。今後も更なる向上を目指さなければならないが、昨今の教員採用の状況を鑑みたとき、新たな手を打たなければ結果の維持向上は容易ではない。

その一つが、文科省が各自治体に要請した教員採用試験の前倒しである。民間企業に対抗すべく1カ月またはそれ以上早めることを推奨している。さらに、年に複数回の受験や3回生での受験も可能としている。それほど教員不足が逼迫していることの表れでもあろうが、とりわけ3回生受験は、4年制大学の学びの意義や確かな養成と採用のバランスを崩す小手先だけの対応のような気がしてならない。教員の魅力ややりがいは、教育実習やインターンシップ、ボランティアなどの体験活動等で時間をかけてはじめて自分事として実感し確立していくものである。教員としての資質や土台作りが欠落しかねない。

しかしながら、この文科省の提唱する流れはやむを得ないとすれば、対策の先取りなど教職支援センターの取り組みにも更なる工夫改善が必要となる。幸いにも、教育学部化構想の只中であって、教職を切に願う学生に有利に働く最新の情報入手とともに、教採に対応した新たな仕組みづくりを教職員が一体となって構築していくときである。

学生の願いが叶う出口保証については、先に示した通り本学は西日本ではトップクラスである。情勢がどのように変わろうとも、本学の過去の経験と実績、そして常に前向きな学生、その学生を育てる教職員が一体となれば、乗り越えられないものは何もないと確信している。

# 「授業における指名の方法」について

文学部 日本語日本文学科  
教授 安原 順子

## 1. はじめに

対面の授業では、教室作業においてどのように生徒や学習者を指名するかで、授業の進み具合が変化する。「指名の方法」を適切に行うことは重要である。生徒や学習者にとっても、よりスムーズに学習が進むかどうかの分かれ目ともなるからである。筆者は、日本語日本文学科に所属し、同時に外国人のための日本語を教える日本語教員の養成を担当している。日本語日本文学科では、毎年、国語科教員志望学生のために「教職研鑽会」実施している。その際も、「授業における指名の方法」は、「教案を書く」「教える」という国語科教員と日本語教員双方の授業の共通点と同様に、重要な課題である。本稿では「授業力」のひとつとして、教師の「授業における指名の方法」について考える。

## 2. 授業における生徒の指名の方法について

国語科教員でも、日本語教員でも、授業での練習方法には共通するものがある。その一つが口頭練習の際の「指名の方法」である。『すぐに役立つ日本語の教え方』（2002）から内容を引用してまとめると、一般的に指名の方法には、以下のようなものがある。

### （1）規則的に指名する

名簿や座席順に従って、規則的に指名する。

### （2）ランダムに指名する

規則的ではなく、任意に指名する。

## 3. 国語科教員と日本語教員の授業における共通した点

次に、「授業における指名の方法」について、国語科教員と日本語教員の授業におけるそれぞれの長所と短所をあげる。

### （1）規則的に指名する場合

①メリット …自分の番が予め予測できるので、リラックスして指名を待つことができる。待っている間に、他の学習者の答え方を観察できる。

②デメリット…緊張感が保てない。指名される問題が予測できてしまうので、それを答えることにのみ集中して、他の問題の答えを考えない。

### （2）ランダムに指名する場合

①メリット …いつ指名されるか分からないため、常に緊張していることになるが、教員の言動に集中せざるを得ず授業の効果は高くなる。

②デメリット・・・緊張しすぎて、混乱する。また、常に最初や最後の指名となると、授業内容より自分への評価を気にしすぎてしまう。通常、最後に指名されるのは、「答えがよく分かっていないだろう人」だからである。

(3) クラスの1人を選んで指名する場合

- ①生徒や学習者を、教員が1人ずつ指名していく。
- ②生徒や学習者を教員が1人指名し、次にその生徒が他の生徒を指名する。
- ③生徒や学習者の1人を指名し、その後同じ答えを全員で斉唱する。
- ④生徒や学習者全員で斉唱してから、個人を指名して答えを確認する。

#### 4. 授業における指名の方法の訓練

では、どのようにすれば上記の問題点を克服し、そのクラスに合った授業における指名の方法が選択できるのだろうか。

(1) 実際に繰り返し練習する

生徒や学習者が目の前にいるさまざまなクラスで、そのクラスに合った指名の方法を試しつつ練習を重ねる。試行することによって、自己の授業を振り返り、よりよい授業ができるように十分な準備をすることができる。

(2) 授業ごとに個人指名の順番を考える

規則的に指名する場合も、ランダムに指名する場合も、指名の順番を考えて指名する。例えば、難しい質問の答えを求める場合は、そのクラスでよくできる生徒や学習者を指名してから、答えがよく分かっていない生徒を指名する。反対に、やさしい質問の場合は、反対に内容が答えやすい生徒を指名して、自信を持たせるように配慮する。

(3) 指名と質問の順序

通常は、質問してからすこし間をあけて指名する。生徒や学習者全員に、「答えを考える時間」を与え、「全員が指名される可能性」を残すためである。先に指名してから質問すると、特定の個人しか答えを考えなくなるからである。

#### 5. まとめ

本稿では、国語科教員と日本語教員の「授業における指名の方法」における問題点について考察した。口頭練習において、どのように練習を組み立てるかと同時に、その練習をどのように進めて行くかは大切な授業テクニックの一つであるにもかかわらず、十分に練習できていないことが多い。授業準備、練習、実践の積み重ねにより、問題点を克服できると考える。

#### 参考文献

小島聡子 (2002) 『すぐに役立つ日本語の教え方』アルク

## 英語の音声の仕組みと英語の音声的な特徴に関する指導について

文学部 英語英米文学科  
准教授 本 田 隆 裕

平成 29 年 3 月に告示された『中学校学習指導要領』において、「第 9 節 外国語」の「第 2 各言語の目標及び内容等」のうち、「音声」については次に示す事項について取り扱うこと、とされている。

- ア 現代の標準的な発音
- イ 語と語の連結による音の変化
- ウ 語や句，文における基本的な強勢
- エ 文における基本的なイントネーション
- オ 文における基本的な区切り

このうち、「イ 語と語の連結による音の変化」が指す内容として、平成 29 年 7 月に示された『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』では、以下のような例が示されている。

- ・ 2 語が連結する場合  
There is an apple on the table.  
Take it easy.
- ・ 2 語が連結するとき，一部の音が脱落する場合  
What time is it now?  
I don't know.
- ・ 2 語が連結するとき，二つの音が影響しあう場合  
Would you tell me the way to the library?  
Why don't you join us?

例えば、上記の“There is an apple on the table.”という例において、連結する 2 語とは、an と apple のことを指している。同様の内容が、同じく平成 29 年 7 月に示された『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』にも記載されていて、より具体的に語と語の連結について説明されている。

- ・ 2語が連結する場合

I have a pen. (have と a が連結) It is good. (it と is が連結)

- ・ 2語が連結するとき、一部の音が脱落する場合

Good morning. (good の /d/ が脱落) I like cats. (like の /k/ が脱落)

- ・ 2語が連結するとき、二つの音が影響し合う場合

Nice to meet you. (/t/ と /j/ が /tʃ/ になる)

What would you like? (/d/ と /j/ が /dʒ/ になる)

それぞれ学習指導要領の解説によれば、これらの内容については、「英語を滑らかにかつリズムカルに話す」ことや、「このような音の連続が英語の聞き取りを難しくしている面もあり、英語を聞くときもこの音変化に慣れておくことが必要である」ということを意図したものである。

ここまでの流れを踏まえると、「イ 語と語の連結による音の変化」には、the book という表現と the apple という表現において、the の発音がそれぞれ[ðə]と[ði]のように異なる発音になるという現象が含まれていないように思われる。上記のように音素の一部が脱落したり、先行の語末の子音と後続の語頭の母音が結合したりする現象とは異なる現象であると考えられる。

朝尾 (2019)によれば、apple のように母音で始まる語が現れると、[ðə]と[æp(ə)]で母音が連続することになってしまうため、これを避けるために、apple の前の the は[ði]のように半母音の[j]をはさむつもりで発音することにより母音の連続が避けられている。(なお、朝尾 (2019)によれば、定冠詞 the[ðə]の母音[ə]は古英語の[e]が弱化したものと考えられるが、[ði]の母音[i]については起源がはっきりしていないようである。)

初級レベルの英語学習者には(あるいはある程度英語の学習経験を積んだ大学生であっても)、the apple を/ðə æp(ə)/のように発音してしまう誤りがよく観察されることは、英語指導者にとって周知の事実であると思われる。(実際には、そのような学習者は、/ð/についても/dʒ/あるいは/z/で代用してしまっている傾向があると考えられる (竹林・斎藤 (2008)).)

後続する語によって発音が決まるという現象を複雑に感じてしまう学習者もいるかもしれないが、そういった学習者には、例えば日本語の「は」や「へ」という文字の音が、現れる環境によって決まる事実を指摘してみてもどうだろうか。日本語話者が、「は」や「へ」の発音で迷うことがないのは、日常生活においてこれらの文字を読み上げるのは、通常「私は神戸へ行く。」のような文や句の中に現れる場合に限られるからである。同じように考えれば、実際に英語を使用する場面において、the という語だけを発音することは通常考えられないのであるが、初級レベルの英語学習者は、語と語の連結や実際の使用場面を想像できずに、単語を一つ一つ発音することに気を取られてしまっているため、the の発音が正しくできないのではないかと考えられる。英語の音声の仕組み、あるいは英語の音声的な特徴を理解させる場面では、学習指導要領に記載された語と語の連結による音の変化だけでなく、後続する語(語頭の音)によって the の発音が[ðə]になるか[ði]になるかが決まるという点についての指導も必要であると考え

られる。上述のように、後続する母音に連続する場合のみ、**the** の発音が[ði]となり、間に半母音の[j]が挟まれることから、この現象は「連結」というよりはむしろ母音の連続を避けるための「分離」という方が的確かもしれないので、学習指導要領の「音声」に記載の事項に追加して指導すべき事項と捉えた方がよいかもしれない。(学習指導要領に忠実に基づいているためかもしれないが、中学校英語検定教科書のうち、代表的な2冊である『NEW HORIZON English Course 1』(東京書籍)と『NEW CROWN English Series 1』(三省堂)を調べたところ、**the** が初出のページには **the** の発音についての説明は記載されていなかった。)

このように、単語の発音については、単語単独での発音ではなく、実際の使用場面(つまり他の語と一緒に現れる場面)での発音を意識した指導が重要であると考えられる。これは、何も **the** という特殊な1語のためだけでなく、次のようなアクセントの移動(accent shift)を理解する上でも重要である。

a Jàpanèse gírl

the Jàpanèse cònstitútion

(竹林・斎藤 2008: 178)

**Japanese** という単語単体のアクセントについては、辞書の記述では **Jàpanèse** のように記載されているが、**a Japanese girl** のように最初の音節に第一アクセントがある **girl** のような単語が **Japanese** に続くと第一アクセントのある音節が変わってしまう。このように、英語の音声の仕組みについて理解した上で、ある単語の発音が常に単独で決まるものではないということ意識し、英語の音声的な特徴に関する指導について理解した上で、授業指導に生かすことが重要である。そのために、単語の発音を指導する際は、単語単独ではなく、その語を含めた句や文での発音指導も同時に行うことを心がけるべきであると考えられる。

#### 参考文献

- 朝尾幸次郎 (2019) 『英語の歴史から考える 英文法の「なぜ」』, 大修館, 東京.  
竹林滋・斎藤弘子 (2008) 『新装版 英語音声学入門』, 大修館, 東京.

# 「教育実習」「保育・教職実践演習（幼稚園）」から探る保育実践力

幼児教育学科

教授 桐原 美恵子

## 1、「教育実習」での学び

ほとんどの学生が実習前に、3週間という教育実習期間を乗り越えられるのかという不安を口にする。期待よりも緊張感のほうが勝っている状況で始まった教育実習であるが、実習後は「子どもたちに元気をもらって子どもたちとの関わりに喜びを感じられた」「もっと子どもたちといたかった」「3週間が早かった」と満足そうな表情で学校に戻ってくる。そんな学生を見ていると3週間が充実した日々だったことがうかがえる。

個々には、部分実習や研究保育で思いどおりに進まなくて悔し涙を流したり、自分が想定していた姿と違って戸惑ったり、日々の記録に追われたりなど苦い経験もあったようだが、いずれにしても学びのある経験だったと理解している。

コロナ禍で、実習前までに近隣園への参観が十分にできなかった学生たちにとって、教育実習での子どもたちとの関わりは貴重な場だった。また、教育実習で子どもたちの前に立つことは、自分が守られてきた立場から、守るべき存在としての意識も芽生え、見方や考え方が違ってくるのも大きな成長といえる。

ある学生は、保育の中で子どもたちへの言葉をどうかければいいのか戸惑い、「それなら」と指導の先生の真似をしてみたが、あまりうまくいかなかったことを実習後の雑談で話してくれた。うまくいかなかった時、学生は「なぜだろう。どうして先生のように子どもたちに伝わらないのだろう」と考えていくうちに、「信頼関係」ということに納得したようだ。そして自分が実習生としてできることは、「子どもたちと思い切り遊び、仲良くなること。つまり当たり前のことをしっかりやることだった」と振り返っていた。子どもに学び、教えてもらった人と人の温かい関係づくりは、きっと今後の保育力になっていくものと信じている。

『幼稚園教育要領解説』<sup>1)</sup>の中にも、たくさんの「信頼」という文字が出ている。例えば幼稚園教育の基本にある「幼稚園教育の基本に関連して重視する事項（1）幼児期にふさわしい生活の展開 ①教師との信頼関係に支えられた生活」の一文に「幼稚園生活では、幼児は教師を信頼し、その信頼する教師によって受け入れられ、見守られているという安心感をもつことが必要である。」と、明記されている。上記の学生は、実習の中で学んだ「信頼関係」と、『幼稚園教育要領解説』の一文が深く結び付いた出来事となった。

他にも教育実習先で現場の先生から、挨拶、言葉遣い、掃除の仕方など細やかな指導を受けた学生もいる。またコロナ禍の厳しい状況にも拘らず、実習を受け入れてくださったことや、不十分な保育指導案を親身になって添削してくださった担当の先生方への感謝の気持ちを「お礼状」という文面で表すことも、スマホ世代の学生にとって貴重な経験である。教育実習では、

保育者としてだけでなく、人としての関わり方を学ぶことができた。

## 2、「教育実習」から「保育・教職実践演習（幼稚園）」へ学びの深まり

幼児教育学科の後期の授業である「保育・教職実践演習（幼稚園）」は、いろいろな形での授業形態を大事にしながら進めている。特に13回中6回の授業は、3つのグループに分かれての演習で、筆者の担当するグループは「保育者の役割」をテーマに学修を進めていった。

教育実習の振り返りや模擬保育などで学んだことから、まず自分自身が考える「教師の役割」について掲げた。それぞれの学生たちの考える具体的な「教師の役割」は、「子どもたちと一緒に遊びを楽しんだり、悔しい思いをしたりすること」「保育者も子どもたちから学ぶこと」「大人の常識や見聞でなく、子どもそれぞれの立場になって、子どもならではの行動や気持ち、やり方等を分かってあげられること」「多様な子ども一人一人に寄り添うこと」「子どもの目線になって、活動を考えること」「子どもが過ごしやすくなる工夫をすること」「保護者に対する言葉掛けや配慮をすること」「安心して信頼できる場所となるよう、子どもの本心を受け止め理解しようとする」と…と次々と出てくる。振り返るごとに、「これは教育実習で学んだ」「教育実習のときに思った」と発表する姿が印象的だった。

更にグループワークでは、実習先は違っても友達の話す子どもたちの姿をイメージしながら討議が進められた。友達の意見に耳を傾け、自分自身が実習の中で気付いたこと、疑問に思ったことなどが、繋がっていく。つまり、一人ひとりの学生たちの様々な場での学びが点となって、広がっていく。そして、それは更に次の学びに深まっていく。

3週間の教育実習での学びを友達と共有することでより深い学びとなっていくことに、改めて教育実習がその場限りでなく、保育者を目指す学生にとって大きな保育実践力を培う場であることを痛感した。



### 【参考文献】

- 1) 『幼稚園教育要領解説』 文部科学省（平成30年3月）